

伊藤一男先生をお送りする

渥美 伸彦

伊藤一男先生は、令和四年三月三十一日をもって、北海道教育大学旭川校を定年退職された。先生は昭和六十年四月に東京学芸大学助手として採用され、その後本校に大学院が設置された平成五年四月に北海道教育大学旭川校助教として着任された。それ以降二十九年間本校で教育研究を続けられたこととなる。まずはこのことを心より慶賀申し上げたい。

この間、先生は国文学（古典文学）担当の教官として、「日本文学講読（古典）」や「古典文学研究法」、「古典文学講読」、「古典文学演習」、「古典文学特講」などの担当教官として学生指導・教育に従事するともに、大学在学中以来の研究テーマである古代日本文学や平安朝文学の表現に関する研究を続けてこられた。具体的には、『物名和歌私抄』翻刻、『拾遺和歌集』他出文献資料稿、『源氏物語』の年齢記述、『蜻蛉日記』所載和歌歌語索引、『小町集』和歌付属語併詞書索引など、和歌や物語、歌物語などに関わる研究である。特に一九九七年から今日まで精力的に研究を行ってきた『古今和歌六帖標注』については、翻刻を行った論文が二十二本、重載歌考が六本、歌枕研究（資料編）、他出文献一覧（勅撰集編）等、多くの論文としてその成果が結実している。また長年の『源氏物語』『大和物語』に関する研究の成果を踏まえ、『王朝文学文化歴史大事典』（九二四、二〇一一年十一月、笠間書院）、『講座 源氏物語研究』（第四巻、二〇〇七年六月、おうふう）、『源氏物語の鑑賞と基礎知識

宿木後半』（二〇〇五年十月、至文堂）など、単共著併せて著書十六本も著された。さらには、旭川に縁のある作家である井上靖について、彼と万葉集の接点に着目した研究も行い、その成果に基づき井上靖記念館で文学講座や講演も行っておられた。

先生が所属している学会は、中古文学会・物語研究会・和歌文学会・日本学校教育実践学会・北海道教育大学旭川校国語国文学会等である。先生は各学会においてその発展に寄与された。特に日本学校教育実践学会では会長を務め、本学会が日本学術会議協力学術研究団体として承認されるような様々な取組に尽力された。その結果、現在本学会は学術研究団体として承認され登録されている。

先生は教育の分野においても、教養科目としては「人文科学入門（短詩形文学）」を担当し、国語教育専攻としては、古典文学ゼミナール、そして専攻代表として学生指導にも尽力し、多数の優秀な人材を育てあげ、世に送り出された。とりわけ幾たびかの科目名の変更はありつつも令和元年度まで継続されてきた「日本文学研修旅行」は多くの学生たちを魅了してきた。京都や奈良など古典文学ゆかりの地を巡る旅は大学内で学んだ知識を実際のフィールドで確かめる絶好の機会として機能してきたと言えるだろう。先生の学生指導における態度は、確かな教養と溢れる知識、優しさと同味溢れるものであり、その学風と人柄は、その学恩を受けた多くの卒業生や修了生さらには国際交流で在籍していた留

学生から深く敬愛されていた。

先生の功績として特記すべきものは、平成二十八年から同三十年三月にかけて北海道教育大学附属旭川小学校長を務め、平成十六年の独立行政法人化以降存在の意味や価値を絶えず問われ続けていた附属学校の役割と責任を再確認するとともに、教職員とのコミュニケーションを充実するなどして、附属学校による教育と研究、そして教育実習の推進について時代に応じた新たな方向性を示唆した。その結果、附属学校と大学との連携・協力が一層進展し、共同研究を行う教科等も増えるなど、充実した関わりができつつある。

また先生は、平成十九年四月から同二十二年三月にかけて旭川校カリキュラム委員長、平成十九年八月から同二十一年三月、平成二十五年四月から同二十七年三月、平成二十七年十月から同二十八年三月にかけて三期にわたり評議員として大学運営にも貢献された。加えて、平成二十七年から始まった学校臨床教授等が担当する必修授業である学校臨床研究等については、授業やカリキュラムの構想等を行うワーキンググループの座長を務め、教員養成に関わるキャンパスで当該授業が円滑に進むよう、連絡調整や対外的な対応等を行われた。当該授業では、附属小・中学校及び近隣公立学校に双方向遠隔授業システムを設置して学生が大学にいながらにして授業研究を行うことができるようにすることが狙いであった。そのため、システムを設置する学校等や校長会等と協議を行うことが多くあったが、見事にその任務を果たし、充実した授業運営に寄与された。

以上のように先生は、長年にわたり研究と教育・指導に従事し、優れた人材を多数世に送り出してきた。その足跡は本学および研究・教育の発展に貢献したもので、その功績はまことに顕著であると言えらるだろう。

冒頭で述べたが、先生が本校に着任された年は、大学院が設置された年であった。実は私はその大学院の一期生である。私の学部時代は古典

文学の先生が不在な時期であった。そのため、集中講義などで学修はしたものの、古典文学に対する知識や理解は甚だ不十分なものであった。そのような中、先生の授業を受講した私に、古典テクストを読みながら先生は『女郎花』ってどんな植物か分かりますか。」と問われた。恥ずかしながら私は全く答えられなかったという記憶が残っている。その後、私は先生と専門は違えども同僚になったわけだが、未だに先生の豊かで深い見識には遠く及ばないと自覚している。

最後になるが、先生は永年住まれた旭川を離れ、令和四年九月に東京都八王子市に転居された。今後とも御健康に留意されて御自身の研究に専心されるとともに、可愛らしいお孫さんとの楽しい時間を過ごしていただければ幸いである。そして、また私に、いや私達に古典文学の世界への扉をひらいて見せていただきたいと切に願っている。